

『三匹の子ぶた』に関する心理学的研究(2)

— 幼稚園教師の考える「望ましい物語」について —

筑波大学心理学系 小野瀬雅人

筑波大学心理学系 石隈 利紀

筑波大学心理学系 福沢 周亮

A psychological study of a fairy tale, "Three little pigs" (2): A story preferred by kindergarten teachers

Masato Onose, Toshinori Ishikuma and Shusuke Fukuzawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

Based on Fukuzawa et al. (1992)'s study, a questionnaire on a fairy tale, "Three little pigs", was prepared to examine a story preferred by kindergarten teachers. Fifty-eight female teachers made a story by selecting a setting from two choices, a development from two and an ending from three, and also stated their reasons for the story. The results of analysis of their responses showed that a majority of teachers preferred a "peacefull story" where cooperation was valued and neither pigs or a wolf was killed, rather than a "realistic story" where a severe part of life was emphasized and the wolf was eaten. An interesting finding was that teachers with 16 years or more of teaching experience preferred a severe story while those with 5 years or less of experiences preferred a peaceful story.

Key words: "Three little pigs", fairy tales, questionnaire, kindergarten teacher.

問題と目的

幼児教育において、絵本や物語を子どもに読んで聞かせることは重要な教育活動のひとつである。こういった活動が子どもにとっての楽しみであるのは勿論であるが、そのためだけではない。これらはいずれも人間形成において大切なこと、つまり、親や教師として子どもに伝えたい何らかの教育的価値を含んでいるからである。

本研究の第一報(福沢・小野瀬・石隈, 1992)では、幼児向けの物語としてポピュラーな『三匹の子ぶた』という物語をとりあげ、その英語版4編と日本語版5編の内容を分析・比較し、それぞれの物語が伝えようとしている価値観を検討した。その結果、物語

の内容については、場面設定、展開、結末それぞれに全く内容の異なるパターンがいくつかみられた。さらに、それぞれの内容も「人生の厳しさに耐えること」「人生の成功」「自立」「勤勉」「協力」「賢さ」という言葉で表現できるような価値を伝えようとしていることが明らかとなった。

そこで、本研究では、まずはじめに、第一報で分析した物語の内容を整理し、それに基づいた質問紙を作成した。さらに、それを用いて、どのような内容の物語が、子どもに読んで聞かせたり本として与える場合、望ましいのか、また、なぜそういった内容の物語がよいのかを、幼稚園教師を対象として調査した。こういった活動に関わる者としては父母をはじめ兄弟、友達などいろいろ考えられるが、まず第

一段階として幼稚園教師を調査対象に選んだのは、幼稚園教師が絵本や童話などを読んで聞かせることを通して子どもの教育に関与することが多く、幼児教育に対する関心も高いと考えたことによる。

方法

1 調査用紙の作成

福沢ほか(1992)の行った、『三匹の子ぶた』の英語版4編と日本語版5編の内容分析の結果を基に、それらの物語を類型化し、基本構造のみを残したものを作成した。すなわち、物語の枝葉末節を削除・単純化し、Fig. 1に示すように、場面設定2つ(A, B)、展開2つ(A, B)、そして結末3つ(A, B, C)が作成された(パターン1)。

場面設定は、三匹の子ぶたが家を出ていく理由で分けた。Aは「家が貧乏で育てきれないため家を出される」という内容で、Bが「大きくなったのだから自分で家を建てるようにと家を出される」という内容である。

展開は、Aが「狼が現れ、三匹の子ぶたの家を襲い、一番目の子ぶたと二番目の子ぶたが食べられてしまう」内容で、Bが「狼が現れ、三匹の子ぶたの家を襲うが、子ぶたは兄ぶたの家に逃げる」という内容である。

結末は3つに分かれるが、Aは「煙突から忍びこんだ狼は、煮立った鍋の中に落ちて死んでしまい、それを子ぶたが晩ご飯に食べてしまう」という内容、Bは「煙突から忍びこんだ狼は、煮立った鍋の中に落ちて死んでしまう」という内容、そして、Cは「煙突から忍びこんだ狼は、煮立った鍋の中に落ちて大火傷をし、逃げ帰った」という内容である。

実際の調査に用いたものは、この物語を園児に読んで聞かせたり、本として与える場合、どのような内容(すじ)がよいかを、場面設定2つ、展開2つ、結末3つから1つずつ選択し、物語を完成するものである。さらに、物語の各部分で、その選択肢を選んだ理由、全体としてそうした内容(すじ)にした理由、および、どのような子どもになってもらいたか、について自由記述を求める質問項目を用意した(付録1)。

2 調査

調査年月 1992年7月。

調査対象 幼稚園8園(公立7,私立1)の教師58名。全て女性で年齢の範囲は20歳代~50歳代である。

手続き 本研究では、各幼稚園に調査用紙を配布し、1~2週間の間に幼稚園教師に回答してもらい、回収するという方式を採用した。

調査用紙は、前項で述べたような、場面設定2つ、展開2つ、結末3つからそれぞれ選択し、ひとつの物語を完成するもので、用紙の最後の頁に選択理由、その他を含む質問項目が付されている。ただし、物語を完成する質問紙の内容は、それぞれ実際の物語から取り出したため、その影響を防ぐために各段階の内容の配置をランダムに入れ替えた4種類の調査用紙が作成された(Table 1)。すなわち、Fig. 1に示したのと同じパターン1(P1)、場面設定と結末を入れ替えたパターン2(P2)、展開と結末を入れ替えたパターン3(P3)、場面設定、展開、結末すべてを入れ替えたパターン4(P4)が、8つの幼稚園にランダムに配布された。

なお、以下の分析で用いられるパターンの記号(A, B, C)は、全て、Fig. 1に示したパターン1(P1)の内容を指すものとする。

結果と考察

1 選択された物語の内容

物語の各段階ごとの分析

まず物語を完成する質問について、場面設定、展開、結末それぞれの選択結果を別個にみていく(Table 2)¹。

Table 1 作成された質問紙のパターン

パターン	P 1 #	P 2	P 3	P 4
場面設定	A B	B A	A B	B A
展開	A B	A B	B A	B A
結末	A B C	B C A	C B A	C A B

#パターン1の記号(A, B, C)はFig.1に示したのと同じ。

Table 2 物語の各段階ごとの選択結果

内容別の結果	人数(%)	
場面設定	A: 貧しいので仕方なく B: 自立を促すため	11(19.0) 47(81.0)
展開	A: 一匹ずつ食べられる B: 三匹とも生き残る	13(22.4) 45(77.6)
結末	A: 子ぶたが狼を食べる B: 狼は死んでしまう C: 狼は逃げてしまう	10(17.3) 13(22.4) 35(60.3)

¹ それぞれの内容を選んだ理由は、付録2に添付してある。

場面設定

昔、あるところにお母さんぶたと三匹の子ぶたが住んでいました。

↓

A
お母さんぶたは貧乏で、子どもたちを育てきれなくなって、自分で暮らしていくように三匹をよそに出しました。

B
ある日お母さんぶたが言いました。「お前たちも大きくなったのだから、自分の家を建てなさい。」お母さんに励まされて、三匹の子ぶたたちは元気に家を出ていきました。

↓

A
一番上の子ぶたは、畑からわらを集めてきて、あっという間にわらの家を建ててしまいました。すると、まもなく、狼がやってきて戸を叩きました。「子ぶた、子ぶた、俺を入れとくれ」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない」「そいじゃ、ひとつ、この家を吹き飛ばしてしまうぞ」そう言って、家を吹き飛ばし、子ぶたを食べてしまいました。
二番目の子ぶたは、木の枝を集めて、木で家を建てました。すると、また、狼がやってきて戸を叩きました。「子ぶた、子ぶた、俺を入れとくれ」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない」「そいじゃ、ひとつ、この家を吹き飛ばしてしまうぞ」そう言って、家を吹き飛ばし、子ぶたを食べてしまいました。
三番目の子ぶたは、れんがをたくさん集めて、れんがの家を建てました。「子ぶた、子ぶた、俺を入れとくれ」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない」「そいじゃ、ひとつ、この家を吹き飛ばしてしまうぞ」そう言って、家を吹き飛ばそうとしましたが、今度は、家は吹き飛びませんでした。

B
一番上の子ぶたは、畑からわらを集めてきて、あっという間にわらの家を建ててしまいました。すると、まもなく、狼がやってきて戸を叩きました。「子ぶた、子ぶた、俺を入れとくれ」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない」「そいじゃ、ひとつ、この家を吹き飛ばしてしまうぞ」そう言って、家を吹き飛ばしてしまったので、二番目の子ぶたの家に逃げ込みました。
二番目の子ぶたは、木の枝を集めて、木で家を建てました。すると、また、狼がやってきて戸を叩きました。「子ぶた、子ぶた、俺を入れとくれ」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない」「そいじゃ、ひとつ、この家を吹き飛ばしてしまうぞ」そう言って、家を吹き飛ばしてしまったので、二匹の子ぶたは、三番目の子ぶたの家に逃げ込みました。
三番目の子ぶたは、れんがをたくさん集めて、れんがの家を建てました。「子ぶた、子ぶた、俺を入れとくれ」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない」「そいじゃ、ひとつ、この家を吹き飛ばしてしまうぞ」そう言って、家を吹き飛ばそうとしましたが、今度は、家は吹き飛びませんでした。

↓

狼は、すっかり怒ってしまい、今度は暖炉の煙突から降りて行って、子ぶたを食べようと思いました。そこで、子ぶたは暖炉で火を燃やし、大鍋にぐらぐらお湯を沸かしました。

↓

A
煙突から忍び込んだ狼は、煮立った鍋の中に落ちて死んでしまいました。そして子ぶたは、それを晩ご飯に食べてしまいました。

B
煙突から忍び込んだ狼は、煮立った鍋の中に落ちて死んでしまいました。

C
煙突から忍び込んだ狼は、煮立った鍋の中に落ちて、大火傷をしてしまいました。そのあと狼は逃げて帰り、二度と現れませんでした。

↓

その後、子ぶたはずっと幸せに暮らしました。

展開

結末

Fig. 1 作成された物語のパターン(パターン1)

場面設定の部分は、三匹の子ぶたが家を出される理由が焦点となる。「自立を促す」内容のBを選んだ者(47名:81.0%)と、「貧しいので仕方なく」という内容のAを選んだ者(11名:19.0%)で、それぞれの度数を比べたところ、有意な偏りがあることが認められた($\chi^2(1)=22.35, p<.01$)。すなわち、「自立を促す」内容のBの方を選んだ者が多いことが明らかとなった。

Bを選んだ主な理由をみると、「貧しくて仕方なく家を出される」というのが、「かわいそう」「子どもに理解できない」など、「世間の厳しさ」を表すものは避けるべきとする消極的なものもあったが、「自立」を促す点が良い、希望のある内容だからよという理由も多かった。

一方、Aを選んだ理由をみると、「人間の生きる厳しさや知恵を語りかけてくれる」「昔々とか、家が貧乏、という言葉は絵本の世界にしか出てこない。別の社会があったのだということ話す機会になる」など、人生の厳しさを、物語をとおして子どもに伝えたいというのが主なものであったが、「自立できる子どもになってほしい」というものもあった。

次に、展開の部分では、「狼が現れ、三匹の子ぶたの家を襲うが、子ぶたは逃げて無事」という「三匹とも生き残る」内容のBを選んだ者(45名:77.6%)が、「狼が現れ、三匹の子ぶたの家を襲い、一番目の子ぶたと二番目の子ぶたを食べてしまう」という「一匹ずつ食べられる」内容のAを選んだ者(13名:22.4%)と比べ、それぞれの度数に有意な偏りがあるという結果を得た($\chi^2(1)=17.66, p<.01$)。すなわち、「三匹とも生き残る」という内容のBを選んだ者の方が多いことが明らかとなった。

その理由としては、場面設定と同様「食べてしまうのがいや」とか「残酷だから」という理由が第一位(45人中21人)を占めたが、「協力」の大切さや「勤勉(努力すること)」の大切さを伝えたいからという理由も目立った。

一方、「一匹ずつ食べられる」、すなわち、三匹目の子ぶただけが生き残るとい内容のAを選んだ理由をみると、「狼が子ぶたを食べるのは自然である」とするものや、「人生を生き抜くには知恵や努力が大切」「努力すれば必ず報われることを知らせる」など「勤勉」の大切さを強調するものが多かった。

最後に、結末部分の「子ぶたが狼を食べる」という内容のA(10名:17.3%)、「狼は死んでしまう」という内容のB(13名:22.4%)、そして「狼が逃げてしまう」という内容のC(35名:60.3%)の3つで、それぞれの度数を比べたところ、有意な偏りが認められた($\chi^2(2)=19.27, p<.01$)。そこで残差分析

を行ったところ、期待値よりもCがとくに多く、Aがとくに少ないという結果を得た。すなわち、「狼は煮立った鍋に落ちて大火傷をし、逃げ帰った」という内容のCを選んだ者が多く、「狼は煮立った鍋の中に落ちて死んでしまい、それを子ぶたが晩ご飯に食べてしまう」内容のAを選んだ者は少ないことが明らかとなった。多くの教師は、狼も生き残る方を選んだのである。

多くの教師がAやBよりもCを選んだ理由としては、展開の部分と同様、「食べてしまうのがいや」とか「残酷だからかわいそう」というのが多かったが、「勤勉者が幸福になる」という意味で「希望」のある話にしたいという理由も多かった。一方、とくに少なかったAを選んだ理由をみると、「因果応報」、つまり「悪い事をする必ず罰がある」ことを伝えたいからというものであった。

なお、場面設定、展開、結末のすべてに共通する選択理由としては、「原作がそうだと思うから」とか「ずっとそのように覚えていたから受け入れやすい」といった消極的なものもあった。教師にとっても、子ども時代に読んだあるいは聞いた物語の印象は、予想以上に強いものなのかもしれない。

物語全体の展開パターンの分析

まず、物語全体の展開パターンを、この物語を類型化する上でキーポイントとなっている、「子ぶた」と「狼」の「生と死」で分けることからはじめた。すなわち、とくに展開と結末で、それぞれの展開パターンを分ける「生き残るか死ぬか」で類型化したところ、Table 3のようになった。

類型Iは、三匹の子ぶたも狼も死ぬことがない平和な物語である。この類型には、場面設定・展開・結末の展開パターンでみるとABCとBBCが含まれる。

類型IIは、三匹の子ぶたは、狼に襲われると兄弟ぶたの家に逃げ込んで無事であるが、狼の方は、子ぶたの用意した煮立った鍋のなかに落ちて死んでしまうか、そのあと食べられてしまうというものであ

Table 3 子ぶたと狼の生死で分類した物語の展開パターン

展開の種類	I	II	III	IV
子ぶた [#]	○	○	×	×
狼 [#]	○	×	○	×
展開パターン	ABC BBC	ABB ABA BBA BBB	AAC BAC	AAA AAB BAA BAB

○:生き残る ×:死ぬ

る。この類型には、展開パターンでみると、ABA, ABB, BBA, BBBが含まれる。

類型Ⅲは、三匹の子ぶたが、狼に襲われるごとに食べられてしまい、一番年下の子ぶただけが生き残り、最後は狼がその子ぶたの建てたレンガの家に侵入する際、子ぶたの用意した煮立った鍋のなかに落ちて大火傷をし、逃げていくという展開である。この類型には、展開パターン AAC と BAC が含まれる。

類型Ⅳは、三匹の子ぶたは類型Ⅲと同じであるが、狼の方は、類型Ⅱと同様、子ぶたの用意した煮立った鍋のなかに落ちて死んでしまうか、そのあと食べられてしまうというものである。この類型には、展開パターン AAA, BAA, BAA, BAB が含まれる。

さて、以上のような分類に基づいて本調査の結果をみることにしよう。Table 4は、それぞれの展開パターンを上述の4類型にしたがって分類したものである。各類型ごとの度数について χ^2 検定を行ったところ、それぞれの度数に有意な偏りが認められた($\chi^2(3)=35.66, p<.01$)。そこで残差分析を行った結果、期待値よりも「平和」な展開の類型Ⅰがとくに多く、子ぶたが狼に襲われ一匹ずつ食べられ、最後は火傷を負いながらも狼は逃げてしまうという展開の類型Ⅲはとくに少ないという傾向がみられた。ちなみに類型Ⅲには AAC と BAC の2つがあるが、実際には AAC を選んだ者はなかった。

全体を通した物語のパターンも、それぞれの段階ごとに選んだ内容と同様、「貧乏」とか「死」といったネガティブな言葉のない物語を、教師の多くは子どもに与えるのによいと考えているようである。お

そらく、これも「平和」や「優しさ」が尊ばれ、「残酷さ」や「厳しさ」が避けられる、別の言葉で表現すれば、「明るい」話が好まれ、「暗い」話は敬遠される時代背景を象徴しているのかもしれない。こうした言語的・文化的な観点からの検討は今後の課題といえよう。

なお、類型Ⅲの AAC という展開パターンは、「貧しいため家を出された子ぶたが一匹ずつ狼に食べられ、最後に生き残った子ぶたが狼に反撃するが、狼の方は火傷を負っただけで逃げ帰る」というものであるが、このパターンを選んだ教師がなかったのも、子ぶたにとっては「努力しても報われない」人生になってしまう展開になり、あまりに気の毒すぎると感じたせいかもしれない。

2 教師歴との関係

本調査においては、質問項目の最後に、教師歴と年齢を自由記述してもらったことにした。その結果、調査対象58名のうち45名の教師歴データが得られた。そこで、5年ごとに区切り、教師歴の分布をみた結果、Table 5のようになった。教師歴の上で若い順に、人数で全体の3分の1ずつに分けたところ、教師歴が1年から5年の間にあり「若手教師」に属する者が15名、教師歴6年から15年の間にある、いわゆる「中堅教師」に属する者が16名、そして教師歴16年から30年の間にある「ベテラン教師」に属する者が14名、という結果となった。それぞれのグループの平均年齢は、若手教師が25.1歳、中堅教師が34.0歳、ベテラン教師が47.1歳であった。したがって、上述のように命名した「若手」「中堅」「ベテラン」の段階に、概ね該当するものと思われる。

以上のようにして分類した教師歴別に、選ばれた物語の展開パターンとその人数を示したものがTable 6である。それによると、類型Ⅱと類型Ⅲはいずれも教師歴で差がなかったが、類型ⅠとⅣではそれぞれ差がみられた。すなわち、類型Ⅰでは教師歴が上がるとともに、このタイプの展開パターンを選んだ者が減少する傾向がみられた。とくに、若手教師とベテラン教師で比べると、若手の方でこれを選

Table 4 展開類型別の結果

展開の類型	展開パターン	人数(%)	計(%)
Ⅰ	BBC	31(53.4)	33(56.9)*
	ABC	2(3.4)	
Ⅱ	ABB	1(1.7)	12(20.7)
	ABA	2(3.4)	
	BBA	2(3.4)	
	BBB	7(12.1)	
Ⅲ	AAC	0(0)	2(3.4)*
	BAC	2(3.4)	
Ⅳ	AAA	3(5.2)	11(19.0)
	BAA	3(5.2)	
	AAB	3(5.2)	
	BAB	2(3.4)	
			58(100.0)

*残差分析の結果、期待値よりもとくに多かった(少なかった)もの。

Table 5 被調査者の教師歴

教師歴(年)	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-30
人数(N)	15	6	10	9	1	4
	若手	中堅	ベテラン			
平均年齢 [#]	25.1	34.0	47.1			
SD	2.95	5.50	7.58			

[#]年齢を自由記述としたため「若手」と「ベテラン」のNはそれぞれ14と10。

Table 6 教師歴と選択した物語の関係

展開の類型・パターン\教師歴	若手	中堅	ベテラン	
I	BBC	10	9	4
	ABC	2	0	0
		12*	9	4
II	ABA	0	1	0
	ABB	0	0	1
	BBA	2	0	0
	BBB	1	2	3
		3	3	4
III	AAC	0	0	0
	BAC	0	1	0
		0	1	0
IV	AAA	0	1	2
	AAB	0	1	1
	BAA	0	1	2
	BAB	0	0	1
		0	3	6*
		15	16	14

*「若手」と「ベテラン」の人数を比べ有意な偏りのあったもの。

んだ者が有意に多い傾向がみられた(直接確率: $p = .0768$)。それに対して類型IVでは、逆に、教師歴が上がるほど、この類型パターンを選んだ者が増える傾向がみられ、検定の結果、ベテラン教師の方が若手教師よりも有意に多いという結果を得た(直接確率: $p = .0313$)。

この結果は、類型Iと類型IVの物語展開を比べるとより詳しく考察できる。つまり、類型Iは、「平和的」な物語で、残酷な場面は一切みられず、いわば「協調性」を尊重した内容となっているが、類型IVでは、人生を生き抜く厳しさや悪い事をしたものは罰せられる「因果応報」、最後まで生き残った子ぶたのように「勤勉者が幸福になる」といったことを伝えようとしている。おそらく、「若手教師」の場合は、日常接する子どもたちが、「協調性」を大切に、「平和的」で「残酷さ」のない、つまり、仲良しで喧嘩や暴力をしないように、という気持ちを物語に託しているのであろう。一方、「ベテラン教師」の方は、むしろ、「悪い事をすれば罰がくだる」とか「勤勉の大切さ」といった、これから人生を歩んでいく上での教訓を、この物語を通して伝えようとしているのであろう。

実際に、それぞれの類型を選んだ理由をみると、「子どもの自立心を育てたいから」というのは、教

師歴に関係なく存在するが、「残酷なものは避けた」「子どもの夢を大切にしたい」というのは、「若手教師」に多いが、「生きていく力強さ」「生きる厳しさ」といった現実的なとらえ方は、「ベテラン教師」でみられた。

こうした教師歴による物語のとらえ方の違いは、子どもをみる経験の差によるものと考えられる。長い間、子どもと接触する経験をもつ教師ほど、客観的に子どもの本質をとらえているからかもしれない。しかしながら、ここでみられる差が教師歴によるものなのか、あるいは年齢や世代の差によるものなのかは、本研究でははっきりしない。というのは、「若手」の教師は20代、「中堅」の教師は30代、「ベテラン」の教師は40代であり、それぞれの教師歴が年代や世代をも代表しているからである。またあるいは、絵本や物語に対する個人の関心の差異の影響もあると思われる。今後は、これらの観点からの考察も必要であろう。

3 まとめと今後の課題

本研究は、『三匹の子ぶた』の日本語版と英語版数編の内容及びそれが伝えようとしている価値を検討した、福沢ほか(1992)を基に作成された調査用紙を用いて、幼稚園教師を対象として、「幼稚園児に読んで聞かせたり、物語として与える場合、どのような内容(すじ)がよいか」について調査を実施した。その結果、物語の場面設定、展開、結末にわたって、「母ぶたは貧乏で子ぶたを育てきれず家を出す」、「子ぶたが狼に食べられてしまう」、そして「最後に狼は死ぬ(子ぶたに食べられる)」といった「人生の厳しさ」を強調する現実的な印象のある物語よりも、「母ぶたが子ぶたをそれぞれ家を立てる(自立する)よう家を出す」、「子ぶたは狼が襲うと逃げる」、そして「最後は、三匹の子ぶたが力を合わせ狼と闘い、狼が煙突から侵入すると、子ぶた達がその下に用意した鍋の中に落ちて大火傷を負い、逃げてしまう」という、どちらかといえば、「協調性」を大切に、平和な印象の内容を選ぶ傾向がみられた。

さらに、この結果について教師歴ごとに検討したところ、教師歴が5年未満の「若手教師」でこうした傾向が強かったが、16年以上経ている「ベテラン教師」では、反対に「人生の厳しさ」を強調する方を選ぶ傾向がみられた。この結果は、子どもをみる経験の差によって、与えるのに望ましいと考える物語の内容も異なる、つまり、物語をとおして伝えようとする価値観も異なるものと考えられる。

今後の課題としては、子ども自身を対象としてこの物語のとらえ方を検討するのはもちろん、彼らと

物語を繋ぐ様々な「語り手」の検討も必要であろう。例えば、最も身近な存在である父親と母親の比較、保護者と教師、男性教師と女性教師、すでに教師となった人と教師の卵である学生、様々の職業をもつ人達の間で比較検討することも考えられる。さらには、同一言語・文化圏内での比較の他に、日本と異なる言語・文化をもつ諸外国の人達との国際比較も考えられる。こうした作業を経て、主として幼児期に語られる物語が、単に、子どもの言語能力や知識を育成するだけでなく、文化も含む「価値形成」の担い手となっていることが明らかになるかもしれない。同時に、「三つ子の魂百まで」という諺のように、幼児期は人間形成において大切な時期なので、物語をとおして伝えるべき大切な価値が何なのか、を明らかにすることも意義があるのではないだろうか。

引用文献

福沢周亮・小野瀬雅人・石隈利紀 1992 『三匹の子ぶた』に関する心理学的研究(1)―物語の構造と伝えられる価値の分析を中心に― 筑波大学心理学研究, 14, 45-53.

付記

学期末のお忙しい中、この調査にご協力戴いた、茨城県つくば市立吾妻幼稚園、竹園東幼稚園、竹園西幼稚園、並木幼稚園、桜南幼稚園、手代木南幼稚園、二の宮幼稚園、そして千葉県柏市学校法人くるみ学園くるみ幼稚園の先生方に厚く御礼申し上げます。

—1992.9.30受稿—

付録1 本研究で用いた調査用紙(3枚綴)

(本研究は、教師のみを調査対象とした.)

【1枚目】

お父さん、お母さん、先生方へ
私たちは、現在、童話の研究をしています。
このたび、下記の調査を計画いたしました。
よろしくご協力のほど、お願い申し上げます。

筑波大学心理学系

福沢 周亮

石隈 利紀

小野瀬雅人

童話『三びきの子ぶた』に関する調査

次のページにあるお話は、「三びきの子ぶた」とか「プー・フー・ウー」として、皆さんによく知られているものです。

お父さん、お母さん、先生方が、ご自分のお子さんや園児に、このお話を読んで聞かせたり、本として与える場合、どのような内容(すじ)がよいとお考えになりますか。望ましいとお考えになるお話のすじを、A, B, C, それぞれの中から選んで、お話を完成して下さい。

なお、それぞれ(A, B, C)を選んだ理由、また、そのようなお話しすじにした理由については、3ページの質問用紙にご記入下さい。

【2枚目】付図参照

【3枚目】

■次の質問にお答え下さい。

- 1) ①で[A または B]を選んだ理由をお書き下さい。
- 2) ②で[A または B]を選んだ理由をお書き下さい。
- 3) ③で[A, B または C]を選んだ理由をお書き下さい。
- 4) このようなお話のすじにした理由をお書き下さい。
- 5) お子さんあるいは園児に、どのような人になってほしいと思いますか。

■幼稚園教諭あるいは保育園保母としての経験年数と年齢(差し支えなければ)をお書き下さい。

教員歴 _____ 年(_____ 歳)

■この調査について、感想・改善すべき点などありましたらお願いします。

☆ご協力ありがとうございました☆

■どのような内容(すじ)がよいと思いますか。A B Cから選んでお話を完成して下さい。

(答は〔 〕の中に入れて下さい。)

むかし、あるところにお母さんぶたと三びきの子ぶたが住んでいました。

A
お母さんぶたはびんぼうで、子どもたちを育てきれなくなって、自分でくらししていくように三びきをよそに出しました。

B
ある日お母さんぶたが言いました。「おまえたちも大きくなったのだから、自分の家をたてなさい。」お母さんにはげまされて、三びきの子ぶたたちは元気に家を出ていきました。

① ()

A
一番目の子ぶたは、畑からわらを集めてきて、あつという間にわらの家をたててしまいました。すると、まもなく、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふきとばし、子ぶたを食べてしまいました。
二番目の子ぶたは、木のえだを集めて、木で家をたてました。すると、また、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばし、子ぶたを食べてしまいました。
三番目の子ぶたは、れんがをたくさん集めて、れんがの家をたてました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばそうとしましたが、今度は、家はふき飛びませんでした。

B
一番目の子ぶたは、畑からわらを集めてきて、あつという間にわらの家をたててしまいました。すると、まもなく、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふきとばしてしまったので、二番目の子ぶたの家に、にげこみました。
二番目の子ぶたは、木のえだを集めて、木で家をたてました。すると、また、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばしてしまつたので、二匹の子ぶたは、三番目の子ぶたの家ににげこみました。
三番目の子ぶたは、れんがをたくさん集めて、れんがの家をたてました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばそうとしましたが、今度は、家はふき飛びませんでした。

② ()

おおかみは、すっかりおこってしまい、今度はだんろのえんとつからおりていって、子ぶたを食べようとした。そこで、子ぶたはだんろで火をもやし、火なべにぐらぐらお湯をわかしました。

A
えんとつからしのびこんだおおかみは、にたったなべの中に落ちて死んでしまいました。そして子ぶたは、それをばんごはんに食べてしまいました。

B
えんとつからしのびこんだおおかみは、にたったなべの中に落ちて死んでしまいました。

C
えんとつからしのびこんだおおかみは、にたったなべの中に落ちて、大やけどをしてしまいました。そのあと、おおかみは、にげて帰り、二度とあらわれませんでした。

③ ()

その後、子ぶたはずっと幸せにくらししました。

付図 調査用紙(2枚目)

付録2 物語の各場面で各々の選択肢を選んだ理由

(注：人数欄が無記入なのは1名であることを示す)

■場面設定(選択肢①)でAまたはBを選んだ理由

[A] …11名(19.0%)：貧乏で育て切れないので家を出される。

- 原作に忠実であるべき(5名)。
- 絵本のイメージ(前に読んだ絵本)がそうだから(3名)。
- 昔話は人間の生きる厳しさや知恵を語りかけてくれる。
- 子どもに自立できる子どもになってほしいから。
- 昔々とか、家が貧乏、という言葉は絵本の世界しか出てこない。現代の飽食やバブルの中で育った子どもに、別の社会があったのだということを話す機会になるのではないか。

[B] …47名(81.0%)：自分で家を建てるため元気に家を出ていく(以前に読んだのがそうだった)

- 本を読んで知っていたから(2名)。
- 昔聞いた原書のままでと思った(2名)。
- 〈貧乏だから出されるという理由が不適切〉
- 貧乏で育てきれないというのは、かわいそう(2名)。
- 貧乏で生活していけないというのは今の幼児に理解できない(2名)。
- 貧乏という先入観を子どもに与えるのを避けたいため(2名)。
- 貧乏という言葉聞いて(子どもが)ふざけて使うため避けたい(2名)。
- Aの貧乏であったから子どもの自立をすすめた、ということは、困難にぶつかったから逃げたという意味にとられるから。

○現実すぎるのがいやだから。

〈自立を促している点が良い〉

- 小さいながらも自立できたら(12名)。
- 将来は自立するのだから(2名)。
- 親の優しい気持ちが出ていて、子ぶたも気持ちよく自立していくような気がした。
- 母親が子どもを愛する気持ち(優しさ)がでている(5名)。
- 大きくなったので、という方が子ども達には受け入れやすいし、納得させやすいのでは。
- 4、5歳児に聞かせるときは、丁度「大きくなる」事に憧れている時期なので、「大きくなった」「一人前になった」という気持ちに共感できると思った。
- 子ぶた達の成長した喜びと、大きくなったから出来るんだ、ということが含まれているから。
- 大きくなったという喜びを感じさせたい。
- 子どもの自立を見守る母親という点で選んだ(3名)。
- お母さんが子ぶたの将来の為を思い、励まして言った言葉だから。

〈希望のある内容だから〉

- 元気にこれから家を建てようという明るさがあるので。
- 未来に希望が感じられるので[童話は子どもに夢を与えるもの](2名)。

○Bが暗い印象で、お母さんぶたの行く末が心配。

〈その他〉

- どんな家を建てるのか興味があると思ったから。
- ただ何となく…

■展開(選択肢②)でAまたはBを選んだ理由

[A] …13名(22.4%)：子ぶたが一匹ずつ狼に食べられてしまう。

- 〈原作がそうだから〉
- 原作に忠実であるべき(5名)。
- 前に読んだ絵本がそうだから。
- 〈食べるのは自然の摂理である〉

○狼だから子ぶたを食べてしまうのは当然である。

〈努力しない(怠ける)と罰がある(因果応報)という人生の厳しさを教えるべき〉

○自分が選んで作った家ではどうなるかをよく知る為に食べられてしまう、という大変さを味わう。逃げて人を頼らない。責任はあくまで自分でとり、自分にふりかかってくるのだ、ということが感じとれればと思った。

○知識や知恵の足りない者は人生を乗り切れない。食べられてしまう。

○知恵と努力することを忘れないでほしい。

○安易な考え・行動は自らも減はず。よく考え慎重に行動することを言っているように思うので。

○努力すれば必ず報われる事を知らせる。“食べられてしまうこと”については、大人が思っているような残酷さには、子ども達が受けとらないと思う。

○核家族で死というものに触れるチャンスの小さい子ども達に絵本の世界で味わわせ、また、自然の中で生活するとはどういう事なのか、狼はどうしてぶたを食べなければ生きていけないのかをわかってほしい。

[B] …45名(77.6%)：狼が襲ってくると兄弟ぶたのところへ逃げる。

〈原作がそうだから〉

- 原作に忠実であるべき。
- 絵本のイメージ(前に読んだ絵本)がそうだから(2名)。
- 〈残酷なのは避けたいから〉

○食べられてしまうのがいやだから[残酷](21名)。

○狼をあまり悪いイメージにしたくない。

〈将来に希望のあるほうがよい〉

- 子どもに夢をもたせたいから(4名)。
- 希望をつないでいきたい(7名)。

〈努力の大切さ(人生の厳しさ)を育てたい〉

○努力をすれば勝てるという気持ちを育てたい。

○わらの家・木の家、各々安易にできたが、自分の失敗を体験して、強いれんがの家まで逃げ込む場所を得てかえって自分の安易さに気付くことが物語の中で自然に語られているので。

○物事を慎重に努力するという事の大切さ。

〈協力することの大切を育てたい〉

- 兄弟愛(2名)。
- みんな力で合わせて生きて欲しい[協調性](8名)。

〈その他〉

○助かってよかったという気持ち。

■結末(選択肢③)でA、BまたはCを選んだ理由

[A] …11名(17.2%)：狼が子ぶたに食べられる。

〈原作がそうだから〉

- 原作に忠実であるべき(4名)。
- 前に読んだ絵本がそうだから(2名)。

〈自然な結果だから〉

○自然の摂理を感じとる。

○食べるのは人生のたのしみである。何とユーモラスで素敵な結末でしょうか。

〈努力の大切さを伝えたい〉

○弱者が知恵によって強者にもなれるんだという事を知ってもらいたい。

〈因果応報：悪い事をする必ず罰があることを伝えたい〉

○悪い事をした者は必ず最後はやつつけられてしまいがち。死ぬよりも食べられてしまう方が残酷かもしれないが、子ども達に話すにも言いやすいところ(聞きやすい)があるように思ったので。

○最後までいはいはきびしさもあつたらと考えた。

[B] …13名(22.4%)：狼は鍋に落ちて死んでしまう。

<原作がそうだから>

- 原作がそうだったと思うから(2名)。
- ずっとそういうふうになってきたので受け入れやすい。

<自然な結果だから>

- 煮立った鍋に落ちたら大火傷ぐらいじゃすまない、かといって食べてしまうのはいやな気がする。

<希望をもたせたいから>

- 狼を生かすことにより、また新しい生活を歩めるように。
- 改めることによって悪は消えるという形を望むので。
- 選択肢①②で残酷な世界を味わったので、③では望みをもって読んだほうが想像にまかせ、個々に思いふけてもよいのではないか。

<因果応報：悪い事をすると必ず罰があることを伝えたい>

- 安易な考え行動は自らも減はず。よく考え慎重に行動することを言っていると思うので。
- 悪い事をした時は、自分も悪い結果になる。三匹の子ぶたの原典の話を忠実に伝えたいので。
- 死んだことで悪は減びる事がわかり、善良に生きようとする心を養うのには十分だと思う。死んで食べてしまうとすると、二重になりインパクトが強すぎるように思うし、狼の腹中には二人の兄達も入っていると考える子どももいるのではないか。②の質問では、兄達は食べられてしまっただけで死んでしまったとは言っていないので。

<その他>

- 狼が死んでしまうことによって安心感が抱ける。
- やや残酷であっても罰として受け止める。Aはリアルすぎてちょっと気になる。

[C] …34名(60.3%)…狼は逃げて帰る。

<原作がそうだから>

- 原作がそうだったと思うから。

<残酷なのは避けたいから>

- 死んでしまう結末はかわいそうだから。
- 罰として火傷だったら救われる感じがするの。
- “死”ということ強調したくない(2名)。
- AとBは残酷なのでかわいそう(7名)。
- 狼を食べてしまったとか死んでしまったとか、やはり残酷過ぎると思う。結局、狼が三匹の子ぶたの前に現れなければいので(C)がよいと思う(2名)。
- 狼が死んでしまい、それを子ぶたが食べるというのは残酷で、子ぶたのイメージがあまり良くないものになると思う。この童話の中で狼の役割は重要なので殺してしまわない方がそれからの狼がどうしたのか子どもの空想もふくらむと思う。

- 悪い狼でも殺してしまっはかわいそう。
- 最後はみんな仲良くし友達になってもらいたいが、こわい思いをしたので、残酷すぎないCを選んだ。
- 狼も死んでしまったらかわいそう。

<希望をもたせたいから>

- 亡くなって終りにしないで、子ぶたと狼の両方の立場を知らせたい。
- 残酷な終わり方は子どもに夢を与えられないので。
- 「死んでしまいました」より「逃げて帰る二度と現れませんでした」の方が子どもに適している。
- 狼は悪者だけれど、Aだと今までの優しい子ぶたではないし、Bでも残酷すぎるので、二度と現れないならCの終りかたの方が楽しく終れると思った。
- 悪者も最後には死なないほうがよいと思う。話が暗くなるから。
- 悪い狼でも死んでしまっは更生する道は開けない。いたずらする子でもいいところはある、ということを教えたいため。

- Aで終る話を知っているのですが、できればCで。狼がいつも悪者だけれど、少しの火傷で死なせず終らせたいと思った。

<自然な結果だから>

- 一番入りやすいと思ったから。
- Aでは子ぶたを食べてしまうが、Cでは食べないので[前との関係で]。
- 原作のお話はA、Bに近いものがあるかもしれないが、狼を食べたしまったというのは、あまり後味がよくなく感じられ、また、Bは狼が死んだということになっているが、死んだ後その狼はどうなったのか、ぶたはその時どうしたかを考えると、やはりCの火傷をして逃げたというすじの方が子どもには話が理解しやすいのではないかと思われる。

- A、Bのように食べられたり死んだりする終りかたは悲惨な思いが残り、話のおもしろさどころではなくなってしまい、後味が悪い。

<因果応報：悪い事をすると必ず罰があることを伝えたい>

- 子どもたちへ善悪の判断をつけるように。
- 悪者も反省をし、良くなるという面で。

<その他>

- Cは二度と現れないと書いてあったので。

■以下のような物語にいた理由

☆残酷な(厳しい)ストーリー展開

【A-A-A】：最も残酷な展開(3名)

- 話に真剣味があり、生きていく力強さを伝えるべき。
- 原作に忠実であるべき。
- 人間の生きる厳しさや知恵を語りかけてくれるもの。

【A-A-B】：二番目に残酷な展開(3人)

- 真の勇気と生活の中の知恵、たくましく親から自立していくための力をもっていくことの大切さ。
- 現実をしっかりと直視して、生きていくための様々な知恵や判断や方法、行動力を修得して欲しい。
- 「ころばぬ先につえ」の諺のように、マイナスの経験を子どもにさせない親が多いようです。その中で絵本ならではの経験も大切にしたい。

【B-A-A】：三番目に残酷な展開(3人)

- 昔きいた原書のままだからと思ったから。
- 最後の食べてしまったというあたりはとても残酷なようだが、自然界の営みであり、幼児の時期にはショックも過ぎればケロツと出来る時期なので、大切な間接経験だと思う。

【B-A-B】：四番目に残酷な展開(2名)

- 私自身は原本を知っているため、たくさんの内容がでていて話のすじは本当のものを与え、なぜそうなったのかが本人なりに理解ができるように、また理解していけるように思っているからです。
- 大人の感覚では食べられてしまう事は、死んでしまう事と考えるが、多くの絵本では食べられるイコール死とはされていない。大ぶた中ぶたの意けは食べられてしまう表現で意けの罰がくだり、狼の悪は死をもって調和がとれていると思う。

☆穏やかな(コミカルな)ストーリー展開

【B-B-C】：最も支持されたすじ(31名)

- 自分の知っている絵本がそうだから。
- 子ども達にとって残酷なので(7名)。
- 弱者いじめをしない。
- 子ども達に死を知らせるのは難しい。
- 成長、兄弟愛、隣人愛、やれば出来るんだという希望が含まれている。
- 兄弟愛で助け合う気持ちが出てくる。
- お母さんの優しさがあって、兄弟の思いやり、みんなの協力

楽しく過ごして欲しいから。

- 子どもの本質には残酷さがある。純真といってもいいが、できればそういう残酷さは知らなくてもいいと思う。本当のことはあとでわかると思う。
- お話を通じて子どもの夢を壊さず、生活していく上で大切なことを教えてあげたい。
- 死を教える(生命)は大切だと思うが、この話は小さい子どもも好きなので、夢をもたせたいと思うので。
- 全体的に可愛らしい子ぶたと少しずるくて憎い狼を懲らしめるお話しにした方がよいと思って。
- 狼が子ぶたを食べたり死んでしまったりする方は、リアリティーがありすぎてしまい、あまり好感を持ってない。
- 童話の残酷性というのはそれなりに意味はわかるのだが、でもやはり私個人としてはあまり残酷な内容を与えたくない。この頃の子どもをとり囲む環境としても(TVなど特に)死について安易に与え過ぎていると思う。
- あまり、親が子を育てきれなくなったから別に暮らそうと言ったり、悪い者は死ぬということを小さいうちから子どもに植え付けるのは好きではないから。

○子ぶたたちがお母さんから離れ、それぞれ自立して生活していくようになってほしい。

- 子どもに「生きる」「自立」を伝えたい。
 - 「三匹の子ぶた」の本当のすじは知っていますが、もう少しやわらかいお話でも良いのでは？と思います。そこでこのように選択しました。
 - 子ども達にお話を読んであげる時に、みんなが死んでしまうのでは、残酷すぎて読み聞かせにくいと思う。その後どうなるのかな？という期待感を持たせたいと思うから選びました(2名)。
 - 素直にお話が読めるようにした。
 - 物語に入り込む子ども達がいちばん純粋に楽しめると思った。
 - 童話は子どもに愛を与えるものだと思うので、子どもの空想が広がるようにしたほうが良いと思ったため。
 - このほうがやさしいストーリーになって、読みながら先のことを考えられると思ったので選んだ。
- 【A-B-C】：次に支持されたすじ(2名)
- 親元を離れても何ごとにもたくましく生きていけるように。
 - 子どもがお話を聞いてあまり抵抗感をもたないように。